

一人は万人のために

ともに生きて

賀川豊彦 活動開始100年

賀川豊彦が米國留学から帰った翌年の1918(大正7)年夏、全国で米の価格が急騰し、庶民たちが米問屋を襲った。米騒動である。富山から全国に広がり、神戸にも波及した。

物価高騰の一因は問屋や商店の買い占めにあった。そこで賀川は、消費者が共同で生産者から物を仕入れる「消費組合」結成を呼び掛けた。3年後、川崎造船所の労働者青柿善一郎や実業家福井捨一ら

生協の原点

が「神戸購買組合」を、実業家だった那須善治や田中俊介らが「灘購買組合」を設立した。

戦後、それぞれ神戸生活協同組合、灘生活協同組合と改め、62年の合併を経て、91年に「コープこうべ」と改称した。現在の組合員数は全国一の140万人に上る。

◇ 生協の戦後復興を先導したのが元理事長・組合長の高村勲(85) 神戸市東灘区IIである。

消費者の生活を守る闘い

終戦の翌年、灘購買利用組合に入所し、「トタン屋根の壊で暮らす人の家を訪ね、生協への加入を呼び掛けた」と振り返る。

当時、賀川が著した「協同組合の理論と実際」に感銘したという。「一日も早く我等の住む村が町が都市がそして日本が協同組合化し、大理想達成に一路邁進されんことを祈ってやまない」(結びの言葉)。高村は「生協が社会にどんな意味を持つ存在かを教えられた」と話す。

而生協は当初からの個人宅配(個配)に加え、昭和30年代、ダイエーやイトーヨーカ堂などのス

ーパー誕生と軌を一に、JR住吉駅(神戸市東灘区)前にスーパー1号店を開店。その後、大型スーパーやコンビニ型など多角経営に取り組み、今では147店を数える。

◇ 神戸大学名誉教授で元理事長の野尻武敏(85) 神戸市西区IIは「今、生協は危機にある。生産者と消費者の媒介や共助、個配を基調とした『原点に返れ』と言いたい」と話す。

野尻は、生協発足時と現代の共通点として「格差社会」を挙げる。賀川は米國留学後、救貧から防貧

へ活動を移した。「困った人が助け合い、貧困を防ぐことが必要」との考えからだ。その共助の精神が今こそ必要との指摘だ。

さらに一昨年、食品偽装が社会問題化し、ギョーザ中毒事件では東京などの生協も打撃を受けた。野尻は「(600を超える生協でつくる)日本生活協同組合連合会は食の安全安心への対応が遅すぎた」と言う。

野尻は、主に高齢者向けに地域の組合員らが手作りの弁当を届けるとなどを提言する。スーパーの出店ラッシュが終息を迎えつつある今、16万軒弱が参加する個配に期待する。

◆ JR住吉駅北のコープこうべ本部の応接室に、賀川の書(写本)が掲げられている。

「利益共楽」「人格経済」「資本協同」「非搾取」「権力分散」「超政党」「教育中心」。54年、当時の田中俊介・灘生協組合長の求めに応じて書いた「協同組合の中心思想」である。

今、生協が消費者の生活安定と向上にどう資するか。賀川の言葉をもう一度かみしめたい。「ひとりでは万人のために、万人はひとりのために」

敬称略 (河尻 悟)



① 生協の戦後復興を先導した高村勲さん。「生協人」としての誇りを忘れない(撮影・岡田育磨) ② 賀川の社会経済理論英文書「友愛の政治経済学」を翻訳した野尻武敏さん。賀川の子孫を語り継ぐと講演活動を続ける(撮影・笠原次郎) ③ いずれも神戸市東灘区